

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：34311

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652149

研究課題名(和文)スタイルとインタラクションを活かす英語学習者方略トレーニング

研究課題名(英文)Learner strategy training: Interactions with learner styles and peers

研究代表者

若本 夏美(Wakamoto, Natsumi)

同志社女子大学・その他部局等・教授

研究者番号：50269768

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：本研究を通して、外国語環境下にある日本人英語学習者のための新たなストラテジー・トレーニング・モデルの理論的及び実践的基礎の構築を試みた。具体的には、研究の知見に基づきつつ(1)外向性・内向性という学習スタイルに注視し、(2)学習者同士のインタラクションを組み込み、これまでにない新たなストラテジー・トレーニング・モデルの初期モデルを構築することができた。

研究成果の概要(英文)：Over a period of three years, these studies have established a preliminary model of strategy training for Japanese learners of English in Japan, in which learner styles such as extroversion/introversion and interaction among learners are focused on.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：第二言語習得理論 Learner strategy Learner style Strategizing Extroversion Introversion EFL context Strategy training

1. 研究開始当初の背景

効果的な英語学習ストラテジーを学習者に教える試み(ストラテジー・トレーニング)はこれまでに数多くなされてきているが、その成果は必ずしも肯定的なものばかりではなく(Wenden, 1987)、ストラテジーの教授可能性自体を疑問視する声もある。どの学習者にも同じストラテジーを与えようとしたことがその原因のひとつとして考えられる。学習スタイル、とりわけ、英語コミュニケーションにおいては外向性・内向性とストラテジーの関連性に注目する必要がある。この点がまず本研究の特徴である。

一方、学習動機の維持及びストラテジーの発展性という点においては、Languaging (Swain, 2008) が参考になるところが多い。Languaging とは、文法説明を教師から一方的に聞き・理解し・利用するよりも、学習者同士が習った文法事項を自分の言葉で説明したり、質問することにより、理解が深まり、実際のコミュニケーションの場面でも利用することが可能になるとする社会・文化的視座を盛り込んだ理論的フレームワークである。個人で学習する場合には、いかに学習スタイルにあったストラテジーを利用しようが、どこかで動機に飽和状態が生じ、学習が停滞する。学習スタイルに加え、本研究では、学習者間のインタラクションを積極的に取り入れる。その理由は、学習スタイルとストラテジーの組み合わせだけに着目すると、個々の学習者に心地よいストラテジーのみを選択し、英語能力の向上に寄与しない可能性があるからである。学習者によっては他の学習者とのインタラクションを好まない者もいるのは事実であるが、その利点も大きい。

日本という文化的にも北米と大きく異なり、また文法学習とストラテジー学習というフィールドの相違など、今後どのような可能性を開花することができるか、未知の部分が多いのは事実である。しかし、日本の英語学習の特徴を視野に入れ、学習スタイルとインタラクションを組み合わせることにより、ストラテジー・トレーニングの新たなモデルとして機能する可能性を秘めている。ここで学習スタイルとインタラクションを組み合わせたモデルを、Languaging をヒントに新たにストラテジィング (Strategying) として提唱したい。いわば Languaging の核心である学習者間のインタラクションとこれまで軽視されてきた学習スタイルをストラテジー・トレーニングの分野に応用しようとする新たな試みである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本人英語学習者のための新たなストラテジー・トレーニング・モデルの理論的及び実践的基礎を構築することにあった。

具体的には以下の3点である。

自ら学ぶ必要性と学習者ストラテジーの重要性、学習スタイルへの着目をする。新学習指導要領 (2008, 2009) にも示されているとおり「英語コミュニケーション能力の育成」は、英語教育の重要な目標であり、ますますグローバル化しつつある現代日本社会においても急務の課題となっている。学校教育においては、外国語活動という新たな授業の導入(小学校)、英語学習時間数の増加(中学校)、英語の授業を英語で行うなど授業方法の変更(高等学校)と施策が提案されているが、日本の英語学習環境では授業外でも学習者が自ら学ぶことは不可欠であり、どのようにして英語を学ぶのか(学習者の立場)またその学び方の指導(教師の立場)に関し、確固とした指針が現在に至るまで得られていない(Rees-Miller, 1993)。現在ほど、学び方(ストラテジー)をどう教えるかに関する知見が求められている時はないであろう。

継続的学習を可能とするためには、学習スタイルにあったストラテジー選択が重要となる。学習者の個人差の研究においては、学習スタイルの重要性は多くの研究者が指摘しているが(Brown, 2005)、なぜかストラテジー・トレーニングでは軽視されてきた。学習スタイルの中でも、外向性・内向性特性は重要であるとされる(Dörnyei, 2005)。本研究では、これまでの学習スタイル研究とストラテジー・トレーニングを結びつけようとした。

構成主義及び社会文化的見地(Lantolf, 2000; Vygotsky, 1986)から学習者間のインタラクションを組み込む。

日本人英語学習者に適したモデルの提案と検証する。3年間に渡る研究を通して、新たなストラテジー・トレーニング・モデルの日本人英語学習者への適用可能性を検証する。

3. 研究の方法

(1) 160名の大学生を対象に、信頼性が確認されている Revised SILL の質問紙により、よく利用される学習者ストラテジーとあまり利用されない方略に関する量的データを収集した。

(2) 約20名の実験参加者に対して、英語運用能力を向上させるストラテジー・トレーニング (Strategying; ストラテジーの協同作業・ディスカッション) を約8週間実施し、質問紙により全体的な評価を、再度 Revised SILL を実施することにより量的な学習者のストラテジーの変化、その質的な変化を検討するためにフォーカス・グループ・インタビュー実施した。同時に MBTI を利用し参加者の学習スタイルを測定した。2013年度のプロジェクトでは語彙サイズを測定するために Nation (2001) の Vocabulary Level Test (2000, 3000, Academic Word Level, 5000 Level) を追加した。

4. 研究成果

2011 年度に実施した Revised SILL の結果 コミュニケーション方略の使用が高いことが確認されたが、一方認知的方略とりわけ語彙学習に関する方略使用が全体として低いことが確認された。これは大学受験を経て語彙学習の直接的な必要性を実感しなくなったためであると考えられる。また、多くの先行研究 (e.g., Lai, 2010; Green & Oxford, 1995) でも実証されている多読 (reading for pleasure) の利用も少ないことが確認された。そこで、2012 年度の Strategying では語彙学習方略、翌 2013 年度では多読方略を指導すべき目標方略と設定し、トレーニングを試みた。以下、それぞれの成果について報告する。

(1) 2012 年度：語彙方略トレーニング Strategying について。参加者の 18 名大学生 (女性、共通の授業の受講生) を対象に 8 週間の Strategying を試みた。4 つの小グループに分け、それぞれのグループで、これまでどのような方略を活用してきたかを Revised SILL の結果をもとにリフレクションさせ、8 週間のトレーニング期間にどのように語彙能力を伸張させることができるか議論をさせた (Metacognitive Stage)。共通基盤を作るためにどのグループでも『京大学術語彙データベース基本英単語 1110』(京都大学英語学術語彙研究グループ、2009) を活用させた。各グループは授業外で毎週 1 時間ずつミーティングを持ち (Group-based Stage) 各自が毎日個人でどのような語彙学習をしているか (Individual-based Stage) を報告し交流をさせた。その様子は毎週ニュースレターを各グループで作成させ、共通の授業内で配布し他のグループの刺激とした。またストラテジー指導者 (Facilitator) はニュースレターをもとにコメントを加え、特に利用するストラテジーを (週を追う毎に) 修正してよいことを強調した。

8 週間のストラテジーイングの中で、多彩な語彙学習方略の利用が見られた。まず覚えるべき単語のソースであるが、共通語彙集に加え、新聞や雑誌 (印刷された従来のもの、インターネット)、音声付き新聞記事 (VOA など)、DVD (フルハウスなどのドラマ)、TED などの講演やスピーチ、大学で利用可能な CALL 教材、授業で使ったテキスト、TOEIC や英検などの英語標準テストのためのテキストなどが選ばれた。一方、具体的に覚える方略については、従来のひたすら何度も書いて覚える方略 (rote-memory strategy) を活用したグループ、個人もあったが、その他単語カードを作る、知らない単語のリストを作る、語呂合わせで単語を覚える、単語のイメージを思い浮かべた、実際に単語のイメージを絵に描いてカード化して記憶、DVD や TED などの音声を含む教材ではまず英語のディクテーション (聞き取り) を行い、その後字幕と照合し、その中で聞き取りにくかった単語を対象に記憶といった認知的方略が多数見られ

た。それに加えて、グループで集まった際に互いに覚えた単語をクイズ形式で出し合っ
て覚えているかどうかの確認する、視聴した TED などのビデオについてまずディスカッションをしたり (英語で) 互いに自分の読んだ新聞記事についてサマリーを言った後に (英語で) ディスカッションなど社会的方略の使用も見られた。一方、学習スタイルに関しては MBTI の中から外向性・内向性特性のみを取り出し活用した。その結果外向的スタイルの学習者が 14 名 (78%)、内向的スタイルの学習者が 4 名 (22%) であった。事後の質問紙の結果 94% の参加者がストラテジーイングについて肯定的な反応を示し、同じ数値の参加者がこのプロジェクトを通して英語学習に関する Belief が変化したと回答した。また 89% がグループベースのストラテジーイングモデルに肯定的な反応を示したが、より内向的な学習者の方が個人ベース学習に好意的な回答を示した。ただ内向的な学習者の方がこのプロジェクトに参加して良かったと回答しており、これは個人ベースの学習を好む日常の英語学習と異なる環境が心地よい刺激となったためと考えられる (フォーカスグループインタビューの結果)。

学習者方略の変化についてはメタ認知方略など他のストラテジーに変化がみられなかったものの記憶方略に有意な上昇が見られた (Paired t-test の結果)。

またフォーカスグループ・インタビューにより多くの重要な事実が明らかになった。い

Group-based Stage の学習はより新しいストラテジーを探索したり、自身のモチベーションを喚起するのに有効である。友人と学習することによって社会的ストラテジーのような新しい方略に気づくことができる、また協同学習がなければ大学入学後に語彙学習をしようと思わなかったと回答した参加者が多かった。プロジェクトは、これまで自分がどのように英語学習をしてきたのか振り返るよき機会を提供し、よりよい方略を考案しようとするにより英語能力がより向上すると信じられる参加者が多かった。一方このストラテジーの困難な部分として、多くの参加者が指摘していたのがスケジュール調整の難しさであった。週に一度ではあるが授業外にグループでミーティングを開くことは価値があるもののその日程調整が難しいようであった。

(2) 2013 年度：多読 (extensive reading, reading for pleasure) 方略を活用した語彙能力向上トレーニング Strategying について。参加者の 18 名大学生 (女性、共通の授業の受講生) を対象に 8 週間の Strategying を試みた。4 つの小グループに分け、それぞれのグループで、これまでどのような方略を活用してきたかを Revised SILL の結果をもとにリフレクションさせ、8 週間のトレーニング期間に 1 冊の洋書 (ペーパーバック) を読む中で、どのようにして語彙能力や全般的英語

能力を伸張させることができるか議論をさせた (Metacognitive Stage)。2012 年度と同様、各グループは授業外で毎週 1 時間ずつミーティングを持ち (Group-based Stage)、各自が毎日個人でどのような語彙学習をしているか (Individual-based Stage) を報告し交流をさせた。その様子は毎週ニュースレターを各グループで作成させ、共通の授業内で配布し他のグループの刺激とした。またストラテジー指導者 (Facilitator) はニュースレターをもとにコメントを加え、特に利用するストラテジーを (週を追う毎に) 修正してよいことを強調した。

本の選択については各グループに任せられたが、結果的に 2 グループが同一の本を選択、他の 2 グループが個々人で本を選ぶことを選択した。本の選択に関しては 95% 以上の語彙を知っているものを選ぶことを強調した (Lightbown and Spada, 2006)。選択された代表的な本は以下の通りである。* *The chronicles of Narnia: The lion, the witch and wardrobe*, **The graduation*, **Sex and the city*, *The charlotte 's web*, *Christmas carol*, *The little prince*, *Diary of a wimpykid*, *The devil wears Prada*, *When I was 20*。(* マークは共通で選択されたもの)。

8 週間のストラテジーイングの中で、多彩なアクティビティーがグループ・ステージで見られた。まずプランニング。8 週間で読むために毎週に読むべきページ数の数値目標が設定され、毎週のミーティングでそのモニタリングがなされ、無理な目標設定については修正がなされ、現実的なページ数の再設定や読む本の変更、またはグループで統一した本を読む形式から各自の好きな本を読む形式への変更などがなされていった。

次に本を読む中で語彙を増やすために利用された方略であるが、自分のわからなかった単語を見直す、10 単語選択して覚える、紙に日本語の意味を書いてリストアップする、スマートフォンアプリを使って覚える、単語をリストアップ、単語帳制作、気になる文章を 1~2 回声に出して音読するなど、多種にわたっていた。ただ、前年度と比較して Strategying 自体の取り組みは低調であり、多読を授業外で取り組む事の難しさをあらためて感じる結果となった。その傾向は事後の質問紙の結果からもうかがい知ることができる。事後の質問紙の結果 19% の参加者がストラテジーイングについて肯定的な反応を示し、約 80% の参加者が否定的な反応を述べた。50% の参加者がこのプロジェクトを通して英語学習に関する Belief が変化したと回答し、63% がグループベースのストラテジーイングモデルに否定的な反応を示した。このことから分かるようにトレーニングすべきストラテジーにより、Strategying の成否は大きく左右される。

一方、学習スタイルに関しては、外向的スタイルの学習者が 9 名 (75%)、内向的ス

イルの学習者が 3 名 (25%) であった (日程の関係で参加者全員が MBTI を受験できなかった)。プロジェクト前には外向的学習者の方が社会的ストラテジーをより多く利用する傾向にあったが ($r=.630$)、事後では逆転し内向的な学習者が社会的ストラテジーを利用していた ($r=-.430$)。これは前年度内向的な学習者の方がこのプロジェクトに参加して良かったと回答していることと同様の結果と考えられるが外向的な学習者と比較してより好む傾向が現れた点については興味深い。

学習者方略の変化についてはメタ認知方略に変化がみられなかったものの記憶方略及び認知の方略に有意な上昇が見られた (Paired t-test の結果)。これは単に語彙を覚えるだけでなく、本を読むために多くの認知的ストラテジーを利用したためと考えられる。

語彙については事前・事後の比較において 2000 語、3000 語レベルでは変化が見られなかったが Academic Word Level、5000 語レベルでは有意な上昇がみられた。

またフォーカスグループ・インタビューにより多くの重要な事実が明らかになった。前年度同様、Group-based Stage の学習はより新しいストラテジーを探索したり、自身のモチベーションを喚起するのに有効であり、友人と学習することによって社会的ストラテジーのような新しい方略に気づくことが明らかになった。

一方予想以上にこの多読は困難を伴ったことも語られた。友人と一緒に取り組むことで意欲の維持はある程度できたものの共通の興味のある本を探すことは困難であり、一方各自の本を読む場合には協同学習で取り組むべき内容が曖昧となる。多読は多様な能力を育成するだけに語彙学習単独の場合と異なり「単に本を読もう」以上のストラテジー・トレーニングが必要なかもしれない。また、グループダイナミクスも大きく影響している。多読の場合英語能力がより大きく影響すると考えられるため語彙能力や TOEIC のスコアなどをもとにグループを形成し、共通のテキストを選ばせるのがいいのかもしれない。または共通テキストに加え個々の本を選ばせるデュアルモードを進めることもあり得るだろう。その他前年度同様スケジュール調整の難しさをあげる参加者が多かった。

(3) 総括

3 年間の研究を通して、図 1 に示すような 3 段階からなる初期モデルを構築することができた。

第 1 段階 Metacognitive Stage ではこれまでの方略利用についてのリフレクションを基礎に活用すべきストラテジーについてのプランニングがおこなわれる。Individual-based Stage ではストラテジーを利用した多くの実際の英語学習がおこなわ

れる。Group-based Stage では各個人での実施が困難な自分自身の英語学習モニタリング・調整や新たなストラテジーの発見がおこなわれる。その際、外向性及び内向性という学習スタイルにより個人学習と協同学習への嗜好が異なるため、普段と異なる環境での学習が新たな刺激とインスピレーションを与えることになる。この個人とグループ・ステージの相互作用により最終的にはBest-fit Strategy、すなわち自分自身に最も適したストラテジーの発見を目指す。

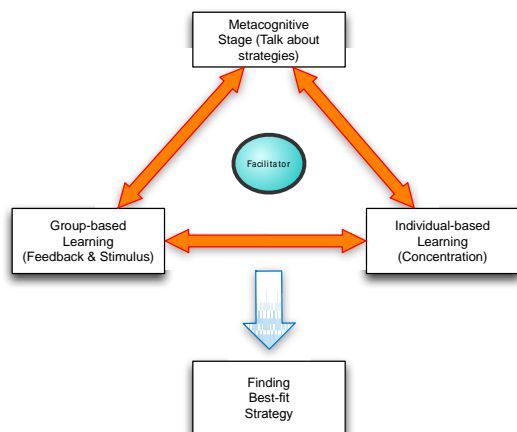


図 1. Strategizing の初期モデル

この 3 年間の研究においては最終段階の Best-fit Strategy の発見にまでは至っていない。しかし、グループと個人学習、それに先立つメタ認知活動を組み合わせることにより従来とは異なるストラテジー・トレーニングを実際におこなうことに成功した。特に英語学習意欲が維持しにくい大学生英語学習者を対象に一定の成功をおさめたことは今後中高校生を対象にいわばジュニア・Strategizing を策定する可能性も秘めている。

今後の課題として Strategizing に適したスキルエリア、ストラテジーを選定すること、グループダイナミクスを視野に入れたグループの形成方法、Facilitator としての指導者の介入・指導方法のあり方についての検討が必要となるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 3 件)

Wakamoto, Natsumi. (2014, accepted). Strategizing: Teaching a controversial strategy. Paper will be presented at the AILA 2014, The 17th World Congress of Applied Linguistics, Brisben, Australia.

Wakamoto, Natsumi. (2014, 2014.3.25). Strategizing: A New Approach to Strategy

Training Integrating Learner Style and Peer Discussions. Poster presented at the American Association for Applied Linguistics 2014, Portland, Oregon.

Wakamoto, Natsumi. (2013, 2013.8.30). Strategizing in learner strategy training: Personality-based learner styles and strategy selection. Paper presented at the The JACET 52nd (2013) International Convention, Kyoto, Japan.

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

http://research-db.dwc.doshisha.ac.jp/rd/html/japanese/researchersHtml/1981/1981_Researcher.html

6. 研究組織

(1)研究代表者

若本 夏美 (Wakamoto Natsumi)

同志社女子大学・表象文化学部・教授

研究者番号：50269768